の事に候へば人心の變移尤もの事と存候實に其頃の小生等はかゝる大義名分の問題が一番興味を感じ居申候
爲些細な事にも腕まくりして議論を始め其都度先生方に不鮮御厄介をかけ候事今更汗顏の至り其酬ひにても
候べく小生は思ひもかけぬ『先生』に打なり今度は反對に日々小豪傑諸君にイビリ廻はされ居申候夫れは兎に
角當時は實にこんな他愛もなき事に力瘤を入れて騷き居つたせいか今の若い諸君に比して何れも人間が鷹揚
であつたかと存候これに比ぶれば一点二点の点數も仇には見ず少しでも良く卒業して他日の就職難を輕く上
て置かねばならぬ抔の近日の學生諸君は御氣の毒見た樣に被存候何でも世の中は日進月歩に相違なけれど
書生ずる身から申せば明治以後なら一年も前の方がよかつた樣に存候は矢張婆樣の昔最負と申すべきや小生
の經驗にては只今迄の生活中第五に在學して居つた時代程上下左右に隔意のない明け放しの爽快な生活は無
之候其頃の人に出會へば先生たりしと生徒たりしとを問はず何となく多少血脈でも續いて居る者と會する樣
な感が致候昔思ひ出しつい無駄話が長く相成申候餘り懷敷ので思はず無遠慮に申上候御採錄の餘地も御座候
はば御掲げ被下度本懷此事に御座候拜具

狐狩

第五回
第六回雜誌部委員　飯田　御世吉郎

僕が學んだ熊本の第五高等學校は、龍田山といふ岡の麓にある。丁度その近邊に白川といふ流があるので、
何かといへば此山と河は、何時も引合に出されたが隨分難有迷惑もしたらう、又かゝると小うるさく思ふこ
ともあつたらう。演說にでも、雜誌にでも、祝詞、祭文にでも、乃至は學校の作文にでも、或は「龍山白水」を

とか「龍田山の麓、白川の畔」だとか、丁度、日本の山水秀靈を稱ふる場合に、何時も富士山と琵琶湖を引に出すと同一筆法で、よく一同が引張出したものであつた。山川に靈かないからこそ仕合で、苦情も小言出ぬか、もしかあつたが最後、佛の顏も三度といふから、いかなる人好の龍田山、白川でも萬更默つてばりはゐるまい。孰れ「五月蠅ね」とか「無斷拜借は御免だよ」とかいつたに相違ない。

龍南會といふ校友會の名稱も、實は龍田山に因んでつけたのだが、樹林鬱蒼たる一帶の丘陵を負ふといふ置に學校があり、又校地の四圍が松林だから、よく狐がどうしたの、狐を見たの、折々噂に上つた事もあた。冬の霜夜などは、寄宿に居るとよくクワン〳〵の聲が聞えたもんだ。

十一月の末頃だつたと記憶する、何でも屋外運動場の芝草が黃んでゐたやうであつた。ドンヨリと曇つた氣の日曜の午後三時頃であつたらう、寄宿生が大勢出でベースや、投球をやつて餘念なく遊んで居つた所誰が見附けたともなく、「狐だ〳〵」といふ聲が、甲から乙へ、乙から丙へと口移しに傳はつた、と思ふとしろ氣早な連中だから耐らない、「やつ附けろ」と罵り騷ぐ。校庭と運動場との境目には木柵があつて、三ばかりの勾配が付いて、運動場の地面が一段下つてゐる其段をなしてる側面に、雨水を吐く土管の口が開ていた。其土管に狐が這入つたといふので、小松の梢をへし折つて來て、松葉をブス〳〵と燻べ立てゝ、一を頻に管の中に煽りこんだ。其上テニス用のネットを持て來て、そこに張つた。數十人の壯俊はベースのットだの、擊劍の竹刀だの、棒切だの、各自に得物々々を携へ、或は上段に振構へてるものもあれば、或青眼に構へてるものもあり、向ふ卷をしてるものもあれば、腕まくりをして力んでるものもあり、居合腰して頑張つてるものもあり、尻端折つて意氣込んでるものもあり、孰れも「曲物ぢさんなれ」といはんばか

一擊の下に撲り殺してやらんず勢凄じく、手ぐすね引いて待ち構へて居つた。其仰々しきたらなかつた。か
く蟻の這出づる隙間もない程嚴重に包圍されては、いかな神變不可思議な魔術ある化性の野干でも、迚も逃
れつこはない。松葉はいよ〳〵燻ふる。煙は雲をなして卷き昇る。罵る聲は一生高まる。「やつ出たぞ」と、
ふ聲諸共、バタリ、ボタリ、ボカ〳〵、ガチ〳〵竹刀、バット、棒切か一切に亂下する。赭い腕が舞ふ。黑
い毛脛が躍る。「やつ付けた〳〵」、「狐が取れたぞ〳〵」と口々に罵る。ウア〳〵の勝鬨の聲。流石に後よ
〳〵と渦卷き來る青松葉の煙に燻べ立てられて咽せかへり遂々耐らずに、土管から出掛つた所を、丁度殺さ
れて了つたのだ。見れば大きな古狐である。齒を喰ひしばり、舌を噛み出し、血を吐きながら大地に横つて
居る。周圍は零時人の山が築かれた。舍内に殘つてゐた連中まで聞付けて悉皆觀に來たのである。兎に角こ
の仰山な狐狩も、獲物が手に入つて見れば、先は一落段を告げた譯。所が「何處にか、何だか鳴くやうな
な聲がするぜ」と誰かがいふ。皆が耳を欹つると、成程近邊に何だかクン〳〵いふやうな鳴聲が聞ゐる。「
テな狐の子ぢやあるまいか」と一人が切出す。「そうだらう」と他の一人が合槌を打つ。末には「そう〳〵」、
皆が調子を合する。鳴聲のする方向を聽き澄すと愈地下の土管の中に相違ないと議一決する。土管の口から
測量して、大抵此邊と思ふ塲所を堀り起す。遂々一個の土管を堀出す。すると其中から鼠位の大さの狐の子
が五匹、ウヨ〳〵轉げ出る。毛は茶色だが、形は狗の子とそんなに違はない。妙な聲で鳴なから、頻に母狐
を探すやうな模樣だから、襟頸の所を撮んで親狐の傍に持てゝやる。すると五匹の子が、我をがちにその側
房に喰いついてチウ〳〵吸ふ。現在殺されて死んでゐる母親を、それとも知らず嬉しそうに餘念なく乳房を
啣む五匹の小さい子狐の樣を觀ては、流石の豪傑連も感動せずには居られない。此悲劇を眼の當りで見ては

何だが一種罪惡を犯したやうな慘い事をしたといふ心地が胸を襲ふた。一同は零時水を打つたやうに靜ま
返つた。

今迄は何の事はない、唯もう夢中になつて騒いでゐたのだが、こうなつて見ると一同の氣も落つき心も靜
つて、さて此親子の狐の始末をどうするかといふ問題に差當つたのである。兎狩にでも往つて狐をせしめ
のなら何の事はない、舌鼓打鳴して狐汁の五六椀は時の間に平けて平氣な連中だが、其日のは誰一人、健
會の好下物にやうと發議する者もない。遂に親狐は商買人に賣つて其代價で五匹の子を舍で養育しやうと
ふ事に善後策が定た。正直に其際の一同の心中を白狀すると、實は内々執念深い野干の事だからといふ薄
味惡さもあつたし、無慘な事をしたといふ後悔の念も多少は萌したし、第一孤兒となつた五匹の子に對し
氣の毒といふ憐愍の情も手傳つた譯で、惡戯者に不似合なこんな殊勝な菩提心を發した次第であつた。そ
から寄宿舍の一室に、狐の孤兒院が設立されて、義捐金募集の始まるやら、孤兒養育掛が出來るやらそれ
〳〵頓だ騒ぎで、毎日暇さへあれば子狐を抱いたり、玩弄物にしたり、牛乳を飲ましてやつたりして、一
で樂んでゐた。氏素生は爭へないもので、始は顏が狗兒のやうに可愛らしかつたが、日が經つにつれて口
邊が段々尖つて何となく貌相が狡猾く、小惡くらしくなつて來た。此分では將來は、馬の糞の饅頭で以て
育の報恩位やり兼ねまいと思はれたのである。

聽て寒中休暇が來たので留守中養育の事は、舍の小使に委細依賴して一同歸省し、「二週間の間に大分生長
たらう」と、内々それを樂みにして歸舍して見ると、こはそも如何に五匹が五匹なから悉皆死んで了うた
の事で、痛く失望したが追付かない。五つの小さい屍を埋めた校庭の一隅に一同で「五狐之墓」と書きつけ

木の墓標を建てゝやつた。

後で聞くと、何でも小使奴が狐に宛がう筈の牛乳を自分達で飲んで了つて、餓殺したのだといふ話で、痛憤慨した連中もあつた。

其時分に教師をしてゐられた彼の有名な小泉八雲先生を訪ふた時、「君方が狐を退治したといふがいつぞや學校の傍で郵便配達夫を魅したといのは其奴だつたらう」といつて笑はれたが、先生も實は孤兒院に一兩何といふ義捐金を惠まれた慈善家の一人であつた。

チヨト忘れてゐたが、土管一個の破損料として大枚五十錢といふ大金を學校から徵收されたのである。

補充時代

江　楠　生

余が補充時代に實は二十年前である。三十年と云へば丁度一世紀の五分の一で所謂ふた昔である。維新前いさ知らず、日進月歩の今日に於ては、二十年と云へば誠に隔世の感がする。其頃は本科の外に豫科が一二、三級、豫科補充科が一、二級有つてまづ中學校の格であつた。併し入學試驗は滅法に難かしくて、英の譯解や書取など殊に準備を要した。其爲めに當時余田司馬人氏の經營して居られた有進校といふ豫備學は非常な繁昌であつた。自分は濟々黌の二年生から入學試驗に應じたが、一級には通らずに最下級の補充二級に通つた。大方百名許りの受驗者中、一級に許された者は僅かに二名で、卽ち四年前までこゝの教授して居られた高木敏雄君と、熊本地方裁判所檢事で在職中死なれた飯盛歡太郎君とであつた。受驗場は瑞